

関蟬丸神社勸進能

第九回 竜成の会

令和六年九月二日(日) 午後二時開演

於 金剛能楽堂

対談 三井寺長史 福家俊彦 × 宇高竜成

仕舞

ツレ 向井弘記
ツレ 湯川 稜
シテ 宇高德成 地謡 重本昌也
ツレ 惣明貞助 山田伊純
シテ 宇高竜成

狂言

月見座頭

シテ 茂山忠三郎 アド 山口耕道

後見 小斉平真路

(休憩三十分)

子方 窪田莉里亜
シテ 宇高竜成

三井寺

ワキ 有松達一
ワキツレ 原 陸
問狂言 茂山忠三郎
山本善之

大鼓 谷口正壽
小鼓 林 大和

笛 左鴻泰弘

後見 廣田幸稔
金剛永謹
豊嶋幸洋

地謡

山田伊純 廣田泰能
豊嶋晃嗣 種田道一
今井克紀 今井清隆
宇高德成 金剛龍謹

終了予定 午後五時頃

ご挨拶

昨年の第八回竜成の会では谷崎潤一郎の随筆『陰翳礼讃』に見る光と影の世界観を蠟燭能で表現する事に挑戦いたしました。その折には多くの方にお力添えを賜り、能「皇帝」を無事に勤める事ができました。ここに改めて心より御礼を申し上げます。

さて本年は関蟬丸神社とも関わりの深い能「三井寺」を勤めさせて頂きます。現在の総本山園城寺三井寺の長史・福家俊彦様下は関蟬丸神社の社殿修復に長年お力を注がれたお方で、この度光栄な事に竜成の会にお越し頂き、三井寺についてのお話を頂ける事となりました。

また今回は仲秋の名月に合わせて、月下の物語を連曲しました。四世紀の中国・廬山の伝説「三笑」八月十五夜に繰り広げられる狂言の名曲「月見座頭」そして「三井寺」です。仲秋の名月の半月ほど前ではありますが、移り変わる季節の中の一二期のひとときをお楽しみ頂けましたら幸いです。皆様のご来場を心よりお待ち申し上げます。

宇高 竜成



うだか たつげ 宇高 竜成 能楽師シテ方金剛流

1981年京都市生まれ。二十六世金剛流宗家・金剛永謹、及び父・宇高通成に師事。初舞台は3歳。子方時代を経て、プロの能楽師となる。舞台活動の傍ら、初心者にもわかりやすく楽しめる「能楽ワークショップ」を企画し、フランス、韓国、アメリカなど海外でもワークショップを行う。2015年より自主公演「竜成の会」を主宰。2017年よりYoutube「竜成の会」チャンネルで動画配信を開始する。2019年「関蟬丸神社芸能大使」に任命される。2020年に京都市芸術新人賞を受賞する。2023年に重要無形文化財(総合認定)に指定される。現在京都を中心に活動中。

【解説】

仕舞 「三笑」

この曲は中国の故事(虎溪三笑)の世界をそのまま能にした演目です。時代は四世紀の東晋の時代、中国仏教の礎を築いた慧遠(えおん)、帰去来辞で有名な詩人・陶淵明(とうえんめい)、道士(道教の宗教者・陸修静(りくしゆせい)の三人が登場します。

場所は中国江西省にある秘境・廬山。慧遠(じ)は山中に東林寺という寺を建て、虎溪という溪流を境界線として、そこより下山しない誓いを立、隠遁修行の日々を送ります。ある日、慧遠を訪ねて陶淵明(じ)、陸修静(じ)の二人がやってきます。三人は腰に腰をかけ、瀑布の絶景を眺めながら大いに語り、詩を作り、酒を呑み交わします。

やがて楽しい宴も終わり、慧遠は虎溪まで一人を見送りに行きます。しかし、酒を飲み過ぎたのか慧遠の足元はふらつき、よめいいたのでとっさに陶淵明・陸修静の二人は左右から慧遠を支えます。仲良く三人は話に夢中になりながら歩き続け、禁足の虎溪を遙かに過ぎて山を下ってしまいました。やがてそれに気がついた陶淵明が、「長年の禁足の誓いを破られるのですか!」と言つと、ようやく慧遠も気がつき、思わす三人で手を叩き笑ってしまいます。

「笑」は狂言ではよくありますが、能ではとても珍しい感情表現です。一体どの様な表現をするのか、どうぞお楽しみに。



狂言 「月見座頭」

この演目は狂言の中でも特別な雰囲気のあるもので、滑稽さや喜劇性よりも、もっと深い人間性を描いた曲です。シンプルな内容ですが、見た後、色々考えたい曲です。

場所は京都、下京区住む座頭(盲人)が「今夜は八月十五夜だけれども自分は月を見る事ができないから、かわりに虫の音を聞きに行こう」と野辺に出かけます。野辺では色々な秋の虫がそれぞれ音を奏で、座頭は心をなませます。そこに月見の為に野辺に来た上京の男が現れ、やがて二人は意気投合し、酒宴を始めます。月の下で歌を歌い、舞を舞い、楽しい時を過ごした二人は、互いに名残を惜しみながらも気持ちよく別れます。

帰り道、男の心の中に「一体何が生まれたのか、なんと上京の男は立ち戻って、先ほどの座頭を嘲り、引き倒して満足気に帰っていきます。野辺に一人取り残された座頭は、それがさっきの男だと気がつかず、「先ほどの人と違い、世の中には情けない人もいるものだなあ」と嘆きます。

舞台芸術というのは、そこに何かの答えが用意されているものではありません。しかし芸術体験から色々な思いを巡らす事が、心の豊かさへと繋がるのではないのでしょうか。そんな体験を是非お楽しみください。

能 「三井寺」

この能は仲秋の名月の下、近江国(今の滋賀県)三井寺で親子が再会するという物語です。親子再会の演目の中でも、秋の静けさが漂う名曲です。

駿河国(今の静岡県)に住む千満(せんみつ)の母は、我が子を人商人に拐われてしまいました。母が行方不明の子の足取りを訪ねて遠方都まで上り、清水寺に籠つて我が子の再会を心に祈ると、「我が子に逢いたければ三井寺に参れ」と不思議な夢を見ます。千満の母が宿を借りていて清水門前の男は、実は夢を占う人で、その夢の告げの内容を聞くと、今すぐ三井寺に向かう事を勧めます。母は我が子に逢える喜びを胸に三井寺へと向かいますが、既に心が乱れていました。

折しも頃は八月十五夜、三井寺では住僧達が幼い弟子を伴って月見をします。そこに我が子に逢うと狂女となった千満の母が現れます。名月の景色に興じて狂女は鐘樓の鐘を撞こうとしますが、住僧がこれを止めます。狂女はその首月景色の下で鐘を撞いた異国の詩人の故事を引いて鐘を撞きます。やがてその姿を見た幼子は、実は狂女が自らの母であると僧に告げ、ついに母と千満は再会を果たします。親子は三井寺の鐘の縁で再会した事を喜び、やがて故郷へと帰ります。